

# 長野県コミュニティスクール検討会 発言要旨

**日 時** 令和6年1月25日(金) 午前10時00分～正午

**場 所** オンライン開催

**出席者** 上沼 昭彦、河西 哲也、塩原 雅由、城村 義人、傳田 智子、早坂 淳  
伴 美佐子、堀田 茂樹

## 1 開会

### ○岡田課長

皆さん、こんにちは。ただいまから、第1回コミュニティスクール検討会を開会させていただきます。本日進行を担当させていただきます県教育委員会文化財・生涯学習課長の岡田憲輔と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本検討会ご出席の皆様方におかれましては大変ご多用の中、ご参加をいただきまして誠にありがとうございます。本日はよろしくようお願いいたします。

なお、当検討会は公開とさせていただきます。本日の様子はYouTubeライブにて配信しております。また、会議の内容は録画をさせていただきます。本検討会につきましては後日YouTubeにて配信もさせていただきます予定となっております。

加えまして本検討会は、県教育委員会が行います政策対話としても位置づけておりますので、ご承知おきをお願いいたします。

それでは始めに、長野県教育委員会教育長内堀繁利より挨拶を申し上げます。

## 2 教育長あいさつ

皆さん、こんにちは。長野県教育委員会教育長の内堀繁利でございます。

第1回のコミュニティスクール検討会の開会にあたりまして、一言挨拶を申し上げたいと思います。本日はこのような会を開催しましたところ、ご多用の中、ご出席をいただきまして、出席者の皆様には、誠にありがとうございます。また、日頃から本県の教育行政にご理解ご支援、ご協力を賜りまして、重ねて御礼を申し上げます。

さて、長野県教育委員会では、地域と共にある学校づくりを進めるために学校運営の参画、協働活動、学校評価を一体的に持続的に実施する仕組みである信州型コミュニティスクールの導入を、長野県独自の取組みとして平成25年度から推進してまいりました。市町村教育委員会や学校・地域の皆様と関係者の皆様のご協力をいただきまして、平成29年度には全ての公立小・中学校に導入が行われたところでございます。

取組の開始以来、地域と学校の協働活動が盛んになったり、あるいはその学校の運営について地域の方と話し合う場である学校運営委員会を設けたりと一定の成果が出てきたことも事実でございます。また、学校運営委員会の議論の熟度に差が見られるというようなことや、学校ボランティアの皆さんの固定化が進みつつあるというような課題も見えてきたところであります。

一方、平成29年度には、学校運営協議会制度いわゆる国型のコミュニティスクールの設置が努力義務になり、現在全国的に設置が進んでいるという状況もございます。このような様々な状況の中、改めて学校と地域の関係性や協働のあり方はどうあるべきなのか。また、その中で、コミュニティスクールという存在は何のためにあるのか。また、どうあるべきか。さらには今後どういう形になっていくのが良いことなのか、といった根本的で本質的な問いについてしっかり整理した上で、今後の政策に生かしていけたらと思ひまして、各分野でコミュニティスクールに関わっていただいている皆様にご参加をいただき、このような場を設けさせていただいたところであります。

この検討会は、本日も含めまして複数回開催させていただき、突き詰めた議論が行われ、そしてまた一定の整理ができれば大変ありがたいと思ひているところであります。

どうぞよろしくお願いいたします。

### 3 自己紹介

#### ○上沼氏

皆さん、こんにちは。飯田市公民館の副館長を務めております、上沼昭彦と申します。本日はよろしくお願いいたします。私は今年度の4月から公民館で仕事をさせていただいております。その前6年間ほど学校教育課でも仕事をさせていただきました。ちょうど29年度に学校教育課に異動になったのですが、本格的にコミュニティスクールの取組が始まったタイミングでございました。飯田市の特徴が、学校と地域を繋ぐそのコーディネート役を公民館担っているというところに大きな特徴があるかなというように認識しておるところでございます。

本日はよろしくお願いいたします。

#### ○河西氏

皆さん、こんにちは。松本市立梓川中学校長の河西哲也と申します。

本日は学校における実践、拙い実践ではありますが、コミュニティスクールの進め方の材料になればと思ひ、お話をさせていただければと思ひております。

よろしくお願いいたします。

#### ○塩原氏

皆さん、こんにちは。大町市教育委員会の塩原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は大町市教育委員会で、マネジメント支援を中心に仕事をさせていただいております。今回の会議では、大町市の国型のコミュニティスクールの実践に基づき、国型にすることによって何が変わっていくのかということについてお話をさせていただければと思ひております。

どうぞよろしくお願いいたします。

#### ○城村氏

皆様、こんにちは。長野県PTA連合会副会長を務めております城村と申します。

私はPTAの立場、特に親側の立場で、本日様々なご意見をと思ひております。また、私個人では保護司の活動、あるいは養育里親の仕事をしております。現在小学校1年生の男の子をお預かりしているのですが、そういった形でも地域において学校の役割、あるいは地域と学校の繋がりということの大切さを私

自身感じたところであります。今日は、コミュニティスクールということですのでPTAの立場でご意見させていただけたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

#### ○傳田氏

こんにちは。上伊那広域連合の傳田と申します。郷土愛プロジェクトの事務局をしております、今回はここに来させていただきました。

郷土愛プロジェクトというと、聞きになれない言葉かなと思いますけれども、郷土愛を大切にしたい次世代育成を核に、産学官、それから地域・保護者の方にどんな効果があるのかというようなことを、12年ぐらいい草の根組織から地域の皆さんと一緒に産学官8市町村で構成メンバーを募り、やってきました。そんな実践的な取組の中で、キャリア教育という職業人の皆さんのご協力をいただいた実践も含めて、地域にとって、子どもたちにとって、キャリア教育や学びを核としていくと、どんなことが起こるのかということをとっても楽しくやっています。そうした取組みを皆さんと共有し、学ばせていただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

#### ○早坂氏

皆さん、こんにちは。長野大学の早坂淳と申します。私は専門が教育学で、教育学の中でも、多様な他者が協働する時はどのような仕掛けが必要なのかということを実践的に研究してきました。その研究で今一番私が面白いと思っているのが、コミュニティスクール、学校運営協議会制度です。

これまで学校の中で、運営されてきた様々な教育の実践、その学校がこれまでやってきたことの成果と課題を踏まえて、そこに地域の皆さんが関わることが、学校の先生にとって、子どもたちにとって、あるいは地域の人たちにとって、どんな面白いことをもたらすのか、ということをご数年、本腰を入れて研究をさせていただいております。

ちょうど平成29年に信州型コミュニティスクールが形上全ての小中義務教育学校に整った段階で、教育委員会の皆さん、文化財・生涯学習課の皆さんと力を合わせて、長野県の小中学校、義務教育学校全ての学校を対象にアンケート調査をやらせていただいたりしました。

長野県は非常にいろいろな意味でコミュニティスクールの特徴が強い地域性を持っているところかなと思うので、その辺の可能性を大きくして、課題を対話の中で乗り越えていけたら、そんな場になるといいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

#### ○伴氏

皆様、おはようございます。伴美佐子です。

私は、平成20年から今のコミュニティスクールの前身である学校支援地域本部事業という事業を通じて、上田市立塩田中学校の塩田っ子応援団という活動で当時からコミュニティスクールと関わらせていただけてまいりました。4年前まで、上田市教育委員会の職員として、コミュニティスクール統括コーディネーターを務めて、様々な学校が地域の人たちと出会い、学校が生き生きとしてくるのが子どもたちの育ちに、素敵な化学反応を示してくれるという現場にたくさんたくさん立ち会ってきました。

今は上田市教育委員会を退職し、地域住民として、ボランティアとして上田市立北小学校のコーディネーターをさせていただいております。このような私の実践の中から学校が生き生きとすると、こんなにも地域が変わる、子どもが変わるというようなお話をさせていただければと思っています。よろしくお願いいたします。

## ○堀田氏

長野市立松ヶ丘小学校の教頭をしております堀田と申します。教頭になってまだ2年目になります。

この2年間で、とても地域との繋がりが深まり、活動が広がってきております。そんな実践もぜひお話できればありがたいなと思っております。長野大学の早坂先生の講演も何回か聞いたことがあり、とても面白く感じ、コミュニティスクールについてもとても興味を持っておりますので、一緒に勉強をさせていただければありがたいです。よろしく申し上げます。

## 4 座長選出

### ○岡田課長

皆様、ありがとうございます。では次に座長の選出に移らせていただきたいと思います。座長の選出につきまして、事務局といたしましては、現在信州型コミュニティスクールアドバイザーを務めていただいている他、コミュニティスクール研究に日々取り組まれておられます長野大学教授の早坂淳様をお願いをしたいと考えているところでございますが、皆様いかがでしょうか。

(異議なし)

皆様ご了解をいただいたということで、それでは早坂様を座長とさせていただきます。これからの進行をお願いしたいと思います。

## 5 検討会

### ○早坂座長

非常に荷が勝ちすぎる役割かなと思っておりますが、皆さんとの議論の中で信州の新しい教育の方向性が見えていくといいかなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今日の会議ですけれども、限られた時間とはなりますけれども、ぜひ皆様のそれぞれのお考え、経験に基づく、これからの教育に向けてのビジョンを語っていただけたらありがたいなと思っております。

### ○事務局

長野県におけるコミュニティスクールの現状と課題についてご説明させていただきます。

少子化、核家族化、情報化等の社会の変化や、地域における地縁的、人間関係的繋がりの希薄化における、地域における教育力の低下、保護者のニーズが多様化するなか、生徒・児童指導に関わる課題の複雑化、教員の働き方改革による学校を取り巻く課題の複雑化、困難化とますます変化が激しく、予想が困難で唯一の正解がなくなっている時代となり、子どもたちを取り巻く教育環境は変化を余儀なくされております。

また、学校指導要領の理念、社会に開かれた教育課程の実現も踏まえ、今後、学校と家庭と地域が連携・協働して取り組む仕組がますます必要となっていくと考えられています。

そのような背景をもとに、地域に開かれた学校から一歩踏み出し、地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む、地域と共にある学校への転換が求められております。

平成25年度より始めました信州型コミュニティスクールは、学校運営参画、協働活動、学校評価機能を一体的、持続的に実施する仕組であり、学校と家庭と地域住民がどんな子どもを育てるかを共有し、協働して行う活動により、子どもたちの豊かな育ちを支える地域と共にある学校づくりを目指しております。

平成29年度末に公立小中学校における導入率が100%となり、各学校において地域の特色を生かし、地域と学校が連携し行われる地域学校協働活動が報告されています。

文部科学省が進める国型コミュニティ・スクールは、学校と地域住民が力を合わせて学校運営に取り組むことが可能となる、地域と共にある学校への転換を図るための仕組であり、法律に基づき、三つの機能があります。

三つの機能とは、「学校長が作成する学校運営の基本方針を承認する」、「学校運営に関する意見を教育委員会又は校長に述べることができる」、「職員の任用に関して教育委員会規則に定める事項について、教育委員会に意見を述べるができる」となっております。

平成29年より国型コミュニティ・スクールは設置が努力義務となっており、令和4年から令和6年の3年間は導入重点期間となっております。

長野県の公立小中学校においては、信州型コミュニティスクール、国型コミュニティ・スクールを導入し、地域と共にある学校づくりを進めておりますが、課題もあります。地域ボランティアの方々の高齢化、固定化、学校・家庭・地域における目標の共有、学校運営委員会の停滞、市町村や学校におけるコミュニティスクール対応への負担感、国型コミュニティ・スクール設置努力義務への対応などの課題が挙げられます。

現在、コミュニティスクールは何のためにあるのか、何をするのか、どう進めていくのかといった根本的な問いもあり、この問いを検討会内で今一度問い直していただくとともに、検討会をご覧になっている皆様と共有していきたいと思っております。

特に学校運営参画の意義については、議論と理解が不足していると言えます。信州型であっても、国型であっても、地域住民が学校運営に参画し、地域学校協働活動を学校運営と一体に行いながら、地域と共にある学校づくりを目指す仕組という点では違いはありません。

地域学校協働活動の充実のための議論は、これまで多く行われてきております。昨年度、県内コミュニティスクールの関係者により行われた検討会では、学校運営参画には熟度があり、熟度の可視化、熟度に合わせた支援が必要であることが示唆されております。

しかし、現状では学校運営参画の意義については、議論と理解がまだまだ不足していると言えます。

コミュニティスクール検討会は、今回を含め5回程度を予定しております。

現在の問題意識に沿いながら、「なぜ」のところをしっかりと検討いただき、その後、「何」を「どうするか」について検討いただければと思っております。

## ○早坂座長

YouTubeライブに100人近い方が今ご参加されているようです。非常に多くの方に興味を持っていただいております。このような皆さんの関心を追い風にしながら、いい議論ができるといいかなと思っています。ところでございます。

まず第1回では、我々が建設的な議論をできる、するための土俵作りのようなものができていくと良いのかなと思っています。それでは早速ご意見をいただきたいところではあります。ある程度、論点は確認しておきたいと思っておりますので、事務局説明であった論点を、私がメモしたものがございませぬので、共有させていただきたいと思っております。

事務局より説明のあった内容を改めて確認していくといくつか論点があったと思います。

まず前半の背景の部分については、おそらく多くの方が共感・共有される部分だったのではないかなと思います。まず地域と学校の連携・協働が今求められているのだということ。その背景には、社会の複雑な問題が、学校だけで対処するには難しい複雑な複合さを持ってきていることです。つまり複雑な問題に対応するには、我々大人たちがまず複雑に繋がりが合っていないなければならないということが前提としてあるということです。

そして2点目の背景として、それを可能にする制度の一つとして、コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)が平成29年より各教育委員会に対してその設置が努力義務化され、進めていこうという国の方針が一方であるのだと。これに対して長野県は、信州型コミュニティスクールという、国型の学校運営協議会制度とは、多くの部分で共通するところもあるのですが、若干違った側面も持った仕組みを推進していると。

平成29年に義務教育段階の全ての学校にこの信州型コミュニティスクールの仕組みが入ったわけですが、これらの可能性と課題を今、改めて考えていきたいというところがこの会議体の目的になっております。

冒頭の内堀教育長からのご挨拶にもありましたように本質的な、根本的な議論、そもそものところに立ち返って、この制度が国的には大きな推進の流れになってきているとはいえ、この信州はどうするのか、長野県はどうするのかということをお自分ごととして、そもそものところから立ち返って考えていきたいと、そのときに柱になる論点がいいくつかあると思いますが、今回の会議では、学校運営参画を一つの柱にしていくということが先ほどのご説明にございました。

地域住民の皆さんが学校運営に関わっていくということが、そもそも何を意味するのか。学校運営参画とは何か、ということもぜひ皆さんが普段やられている、あるいは関わられているものについてご意見をいただけたらと思います。特に大事になってくるのは、地域の方、あるいは学校の外にいる企業、NPOあるいは私のような大学教員が、学校運営に関わるということが、何を可能にするのか、その意義は何なのか、ということがこの会議体で何らかの答えが出せていけるところ、紡いでいけるといいなと思います。まさにそのポイントかなと今の説明を聞いていて思ったところです。

この後の論点として、この学校運営参画を一つ念頭に置いていただいて、できればそれが今どんな形で進んでいるか、あるいは学校や地域、そして何より長野県で大きくなっていく子どもたちにとって意義があるのか、この論点で意見交換をさせていただきたいと思っております。

多様な方にご参加いただいているところでもありますので早速、意見交換に入っていけたらと思います。

○河西氏

何がいいことがあるのかということに関してですが、私の経験からなので、これが全てというわけではありませんが、地域の方と子どもたちが一緒に何か活動すると、本当に地域連携というものが良いように機能している時には、地域の方から子どもたちにプラスのフィードバックがたくさんあります。笑顔と「ありがとう」「助かったよ」「また頼むね」という、このプラスのフィードバックが子どもたちの自己有用感を伴った自尊感情を高めると感じます。そうなると子どもたちは次も頑張りたいという気持ちになり、これが子どもたちの自学自習のサイクルを回すエネルギーになってくるのではないかと感じています。

## ○早坂座長

まさに非認知能力の部分、子どもたちの学びを根底で支えるところのエネルギー、それが地域の皆さんから提供される。そういった実践からのご意見をいただきました。関連しても結構ですし、また別の観点からでも構いませんが、他にいかがでしょうか？

## ○傳田氏

根本的なことを理解していなくて申し訳ありませんが、学校運営参画というのはどういうことを意味していますか。先ほどの協働的なことによって起こる効果ということとはとてもそのとおりだと思うのですが、運営参画というそこがどういったものをイメージしているのか、皆さんのイメージの共有を図りたいと思うのですが。

## ○早坂座長

とても大事なポイントですね。自由にご意見いただこうと思っていましたので、その定義を後回しにしていたところではありましたが、学校に地域の方がこの運営にまで入っていくというところ、それが一体何を意味しているのかということについて、まず私から簡単に私の理解を説明させていただきます。これまで学校運営参画は、学校長をはじめとして学校がやっているものでした。(視覚的にも共有しながら、皆さんと考えていけたらとも思いますので、画面共有させていただきます。よく使われるもので恐縮ですがコミュニティスクールが説明されるときのです。)右側には校長先生・学校職員の皆さんがいて、基本的にはこの方々が、これまでもそしてこれからも学校運営の基本方針をつくっていく、ここは変わりがないわけですね。コミュニティスクールというのは、この従来の学校の運営、あるいはそれに関わる意思決定の仕組みに地域の方を巻き込んでいく、地域の方と共にやっていくというのがこの学校運営協議会の学校運営になるわけです。

学校運営については、この右側にいる校長先生を中心とした学校運営の基本方針を、コミュニティスクールの中にある協議会、信州型の場合は運営委員会という呼び方をしますが、この合議体の中で議論していく、学校運営に地域の方が参加するということと、学校運営に地域の方が参画するということで、それぞれまた皆さん様々な理解あるいは認識があると思います。

私は、「ただそこに地域の方が一緒にいる」というのを『参加』と呼ぶとすると、『参画』というのは「より主体的な前のめりな関わり、自分ごと感がより強い意味合い」として捉えています。

国型、いわゆる学校運営協議会を持っている学校は、この図にあるように、学校長が作成した「学校運営の基本方針を承認する」という法的な強い権限を持っています。この権限が参加(ただそこにいる人たち)を、より自分ごととして関わる一つの大きな原動力になるのではないかなというのが、私が今考えている学校運営参画です。

信州型コミュニティスクールについては、この法的な権限が運営委員会にはないので、学校長と共に議論、あるいは情報共有してもらおう場にはなりうるのですが、制度的にこの権限の有無というところで「参加」なのか「参画」なのというところが、どうやら意見が皆さんでも分かれそうだと思うところなんです。とりあえず私の理解・認識は、この法的な権限を持って参画していくか、あるいは地域の方が権限はないけれども学校と伴走しながら学校の運営に参画していく、教育方針にいろんな意見を言ったりする。学校長はそれを踏まえて最終的にリーダーシップを発揮して、どちらの参画だろうが参加だろうが学校を回していく、そういったイメージです。

皆さんはどのようにこの学校運営参画を捉えているのか、ぜひご意見いただけたらと思いますがいかがでしょうか？

○城村氏

今、早坂さんの方からお話のあった「参加」なのかあるいは「参画」なのか、これは本当に肝かなと思います。

私も子どもが5人おまして、ずっとPTAに関わってきていますが、住んでいる地域の役員等も引き受けてやっています。そのような中で実際、子どもが中学・高校に行ったけれども、地域住民として小学校や中学校に関わりたいたいという元保護者もいるわけですね。そういった方々が学校に関わっていきたく願った時に、具体的に言うと参画をしたいと願った時に、学校サイドの方は、必ずしもそこまでは求めてないということは正直あるのかなと思います。この温度感のギャップというのは、私自身も一地域人としてやはり感じるところです。

これが県の単位でしっかりとこうだとまとめていくべきなのか、どうなのかは、私は専門ではないので分からないのですが、現実、地域住民として学校に関わっている中では、まさに早坂さんがおっしゃったところはとても課題感を感じています。

もう一つ加えて言うならば、PTAの小中学校の子どもたちが14万7000～8000人ぐらいいるわけですが、今後毎年3000人ずつ減っていきます。

毎年3000人が減っていく中で小学校が存続し、地域がつくられていくわけです。当然、地域にも高齢化や人口減少の課題がある中で、おそらく地域だから学校だからということではなく、お互いに助け合う、お互いにビジョンを共有し合っていくところを目指さなければ、なかなか絵に描いた餅というか、もっと言うと、学校サイドでは校長先生のキャラクターによって地域との関わり方の濃淡が結構変わってくるというのは、個人的には感じています。

そういった意味で今お話があった「参加」なのか「参画」なのか、ある程度のビジョンが定まってくると、地域住民としても学校には関わりやすいというのが個人的に感じているところです。

○早坂座長

「参加」と「参画」、まさにここが肝だということで、PTAの立場からご意見いただきました。他にいかがでしょうか。この学校運営参画をどう捉えているか、ここを少し深掘りしていきたいなと思いますが。

○堀田氏

学校サイドですが非常に難しい問題だと思っています。例えば、学校のどの部分に地域の方が入ってきて、意見を言ってもらって、例えば承認や権限を持ってもらう時に、どのような部分に入ってきてもらうかということが非常に難しい。学校のランドデザインもありますし、校務分掌といった先生方の仕事の分担もありますし、当然クラスもありますし、様々な状況の中で学校も先生たちでこうしていこうというものがあります。全ては恐らく無理だと思いますので、コミュニティスクールという部分の繋がりが深まってくるといいなど、その部分は学校でも入ってきてほしいと思うのですが、その他の部分でどこに入ってきて意見をいただけるかなと考えると、やはり難しいところはあるなと今お話を聞いていて思いました。

○早坂氏

学校からこの参画を求めるときの難しさという点でご意見いただいたところでございますが、その他いかがでしょうか。



堀田さんからのお話は、PTAのお立場で参加を求められるが、参画までは部分的には求められていないかもしれない、そんな雰囲気を感じる学校についてのお話ともちょっと重なっていくところなのかなと感じました。

ここはぜひ協力してほしいけど、ここは学校に任せてほしいという思いも学校の中にはそれぞれあろうかと思いますが、学校の本丸はやっぱりカリキュラム、教育課程だと思います。要は地域の皆さんと「何か行事をやりましょう」という「活動をやりましょう」というレベルではなくて、学校の教育活動を充実させるために参画が必要だという、この視点があると、恐らく地域と学校がお互いに共有できる部分が出てくるように思うのですが、教育課程に絡めて学校運営参画を語っていただける方、いらっしゃいますか。

#### ○河西氏

実践の中で、こうすると地域連携ってうまくいくなというコツのような部分からお話させていただければと。

地域連携のポイントを私なりに考えているのが、「子どもと地域の必要感を重ねる」という、部分であります。どこまで入ってきてもらうかということ考えると難しいのですが、地域連携が自然に無理なく回って行って、双方が楽しくなる。そのポイントとして、ミスの原因は子どもの必要感のみを最優先してしまうことです。どういうことかということ、子どもの必要感というやる気のもと、興味関心、これは無限大だと考えます。その中に地域の必要感、やる気のもとになる地域の課題の解決も含まれている。

こういう大前提で考えたときに、学校ではよく総合的な学習の時間で地域連携を行ったりしますが、子どもたちの総合的な学習の時間の課題を地域の必要感と重ならない形で設定する。そうすると地域のやる気というのが十分に引き出されない。地域にとっては、負担になってしまうことが多いのです。これを次に示す形にしてみてもどうかと。

地域の必要感の中に、子どもたちの総合的な学習の時間の課題を設定する支援を学校が行う。この支援が学校の役割で、地域の役割は地域の必要感を子どもたちと共有するという部分にあって、これやると、先ほどのケースとは全然違って地域のやる気を本当に引き出すことができるのです。

こうなるとどうなるかということ、先ほど言った地域から子どもへ「ありがとう」や笑顔による本気のプラスのフィードバックがたくさんあり、子どもたちの必要感、活動への必要感が強化されて、次への課題に繋がる。そうすると、自学自習のサイクルが始まる。子どもたちが学ぶということは総合的な学習の時間に限らず、教科や領域の中でも同じであるということ子どもたちも体感するし、そこに関わっている先生たちも実は体感できるのではないかなと思います。学校の教室の中でだけは、絶対に手に入らない子どもたちの自己有用感、自尊感情の高まりが、地域連携の中では、地域が回ると本当に簡単に手に入る。

その点から考えると、地域の役割と学校の役割は、地域の人たちには「君たちの力が必要だ」ということを子どもたちに伝えてもらう。活躍の機会や役割を提供してもらう。

学校としては総合的な学習の時間だけでなく、特活でも何でもできるなど考えていますが、意欲を高め、活動の価値の自覚を促すというような、そんな役割分担を学校と地域が果たすと、学校運営参画という部分が、地域の人たちがこうしてほしい、ああしてほしい、どんどん湧き出してくるので、職員と話している時に「子どもたちに次はこんなことをお願いしたい」とか、「あんなことをやってもらえたら嬉しい」という意見がどんどん出てくる。それから子どもたちもやる気になるので、今までが先生たちだけが作った教育課程が、地域の人や子どもたちも含めて作り出されるのではないかなと考えます。

## ○早坂座長

資料も含めて大変視覚的にも腹落ちしやすい形でご説明いただきまして、ありがとうございます。要は、地域との連携協働が目的ではなくて、目的はあくまでも教育課程の充実、学習指導要領のより円滑で本質的な実施というところであって、それが学校の中だけで先生だけでやろうとすると手に入れられないものを、地域の方の皆さんと一緒にやってくことで、その学びが深化、深まっていくということですね。地域との連携・協働はあくまでも手段であると。本丸は学びだということですね。

ここは大事だと思いますが、皆さんからいただいた「学校の参画」というところから、どんどん本質的な議論に入ってきていると思います。今のお話についてどなたかいらっしゃいますでしょうか。

## ○伴氏

私も長くコミュニティスクール、地域学校協働活動、学校との橋渡しをしてきましたが、その経験の中からもより良い学校運営参画ができるために、最も重要だと思っていることが一つあります。それはやはり校長先生の経営ビジョン。校長先生がこういう学校を作りたいというように夢を語っていただける。そのことについて関わる大人たち。それから、学校の先生方、みんなでその目標に向かって進める、そういうことは重要だなと感じていて、それが示されないままに地域の人たちがどんどん学校に押し寄せると、地域の熱い思いを受け止めきれず難しい結果になるのかなと思っています。そのため、校長先生たちが夢を語れるような場を作れるように、学校運営委員会の中を柔らかい雰囲気にしたりすることを心がけているようにしています。

## ○早坂座長

夢を語るというのは素敵ですね。校長先生が夢を語り、地域の方と共にその夢がビジョンとして洗練されていくという、その対話の中で具現化されていく、そのようなことを可能にするのがコミュニティスクールではないかというところでございましょうか。ありがとうございます。

## ○塩原氏

今、校長先生の経営ビジョンという言葉が出てきましたので、大町市の実践で感じていることをお伝えしたいと思います。以前、大町市は信州型でやっている学校がたくさんありました。数年前に信州型を全て国型に変えました。信州型から国型に変わったことによって、何がどのように変わったのかということをごここでお伝えします。

まず、校長先生のマネジメント力が高まり、教職員や地域住民が納得する経営ビジョンを学校運営協議会に提示できるようになってきました。信州型の時には、それほど地域の方々が納得できるようなビジョンは示されていませんでした。これは大きな変化かなと思います。なぜ校長先生の経営ビジョンがこのように変わってきたのか。

それはやはり、国型になったことによって承認をいただかなければ前へ進めないという厳しさがありません。校長先生たちの意識の中に、地域の皆様と一緒に学校経営を行う際のビジョンをつくらなければならないという変化が生まれたのだと思います。続いて校長先生の経営ビジョンと出会った先生方が、自主的・自律的に教育活動を行うようになっていく。理由は、その理念と向き合ったことにより、教師としてのあり方を再考したことによります。理念には学校のミッションを果たすための考え方が示されますので、そのような経営理念と出会った先生方が、今までの教育実践を見直し、その中で教科の授業改善が飛躍的に進みました。

自主的・自律的に教育活動を行うようになった先生方が提供する教科学習の中で、子どもたちの学びの姿が変わります。先ほど早坂先生も学びというのはキーワードになるとおっしゃっていましたが、やはり先生たちの考え方が変わってくると、授業が変わり、その中で子どもたちが豊かに学ぶようになる。そして学びの面白さを経験した子どもたちが、学びのフィールドを教室から地域へ移して、地域住民と交流しながら探究活動を行うようになります。その交流活動の中で、地域住民の皆様が、子どもの変化、そして先生方の変化を感じます。そして、その変化に気づいたことによって、地域住民の皆様は、学校への関心を高めるようになります。大町市では今申し上げたようなことを好循環と考えています。その好循環によっていくつかの学校では、地域に開かれた教育課程が実現するようになってきています。

冒頭で教育長先生が国型のコミュニティ・スクールによって何が変わるのか、という発言をされておりましたけれど、このように国型にすることによって、まずは学校が変わってくるということでございます。

#### ○早坂座長

コミュニティスクール、学校運営参画が国型でより進んでいくことで、多方面に好循環が最終的に生まれていくという、今のお話はすごく興味があるところですが、1個だけ質問させていただきたいと思えます。今のお話では、最初のきっかけとして、好循環が、校長が変わって、教職員が変わって、自主的・自主的な教科学習の改善が生まれて、その中で子どもの豊かな学びの面白さに気づいて、学びの場が教室から地域に探究的に出て行くようになって、その子どもの変化を見て教職員はまた変わってというように、地域の人も変わって、この好循環、まさにこの運動をぐるぐるぐるぐる回していく時の一番の肝になるというのでしょうか。最初に変えなければいけない、動かさなければいけないというところは、今のお話ですと校長のビジョンということになるのかなと何となくイメージとしては思ったのですが、そのように理解してよいのでしょうか。

#### ○塩原氏

今日も校長の立場で河西先生が会議に出席されていますが、これからは校長のビジョンが大変重要になると思えます。

大町市教育委員会は、「地域の教育は地域でデザインする」ことを大事にし、そこでは新しい制度を活用して教育改革を進めてきました。新しい制度は、義務教育学校制度そして学校運営協議会制度。大町市は少子化が深刻な状況ですので、この新しい制度を使って教育改革を進めていきたいと考えたわけです。また、全ての学校が共通に持っている課題「学習指導要領の円滑な実施」を関連させました。つまり、二つの制度と学習指導要領の実施をパッケージにして、学校と一緒に考えようとしたわけです。その時に考えなければならないことは教育委員会と学校の関係です。教育委員会はパッケージにして提示していきますが、受け取る側は学校です。学校がそのパッケージされたものを、自分たちの主体性を担保するものとして受け取れるかどうか、そこが重要な問題だと思っております。

#### ○早坂座長

ありがとうございます。とても腑に落ちるところだという印象です。

#### ○上沼氏

学校の運営に地域側から関わる、そんな視点で少し話をさせていただければと思います。先ほど学校参画の学校経営、参画なのか参加なのかという話も出ていますが、地域側としてもやはりそこはきちんと参画していきたいと考えております。

学校運営協議会において、学校のランドデザイン、目指す子ども像をきちんと学校、家庭そして地域で共有する。その実現に向けて、お互いの役割をきちんと確認するということは学校運営協議会で進めております。

要は3者、関係する子どもたちを取り巻く関係者が、目指す子ども像、地域の子どもたちにこうなってほしいという姿を共有する。そして、その実現に向けてお互い自分たちに何が出来るのかということをしっかり考えて取り組んでいくと、そのような意味でも参画という考え方はとても大切になってくると思います。

飯田市は元々地域と学校の関係が非常に強かったのではないかと。コミュニティスクールという制度が始まる前から、学校で様々な教育活動に地域が関わるといった取組が盛んに行われていたというように思っております。飯田市の教育振興基本計画では、教育ビジョンにおいても、地域力による未来を開く心豊かな人づくりということ掲げています。地域力というのは飯田市で作った造語ですけども、飯田の資源を生かして、飯田の価値と独自性に自信と誇りを持つ。そういった育む力をしっかり使って地域に愛着や誇りを持つ子どもたちを育てていこうと、そういった考え方をとても大切にしています。公民館、地域側としても、まず自分たちの地域の子どもたちに、地域のことをやはり知ってもらいたいですし、その価値や独自性のようなことについて理解いただいて、ゆくゆくは地域の担い手として育ててほしいと、そんな思いを強く持っています。

そのような意味でも、やはり学校と地域を繋ぐいわゆるコーディネートの機能が、とても大切になってくると。そういった中で飯田市は公民館活動が盛んだということもあるのですが、地域側が様々な人材や情報を持っていますので、そこ学校との教育活動をうまく繋げていくことによって、魅力ある学校の教科が展開されると。学校だけではもしかしたら難しいような学習活動も、そこに地域が関わることによって、実現されていく。おそらく地域の方々も、その子どもたちの教育活動に関わって、先ほど河西先生から子どもたち感謝されるような発言もありましたが、そのようなところで主体的に活動することによって、達成感や満足感のようなものが生まれてくると思います。地域側の経験蓄積のようなものもやはりとても大切ではないかと思えます。

飯田市のコミュニティスクールの考え方は、「良い地域が良い学校を作る」、「良い学校が良い地域をつくる」といった好循環を作っていくことが、コミュニティスクールの大きな可能性ではないかと考えているところです。

#### ○早坂座長

PTAの城村さんからもお話があった地域の側からすると参画していきたいという思いが、公民館の立場でも同じように出していたのかなというところですか。

良い学校と良い地域の好循環、これを生むにはこの制度がどう貢献するものなのか、コミュニティスクール、そこを掘り下げていきたいなと思いますが、この時点で傳田さんから最初にいただいた学校運営参画とはそもそも何なのかという、そもそも論のところから入ってよかったなと思いました。

ここまでのところをざっくりとまとめさせていただくと、まず学校に地域の人たちが、ただ参加するのか、参画するのか。まずここが論点の一つとして今後も深めていきたいポイントだなというところでしょうか。地域の方からすると学校にはもっともっと参画、より主体的に参画していきたいと思いつつながら、学校からするとどの範囲に参画してもらおうのかというところについては、少し慎重にならざるを得ないところ、子ど

もの安全安心もしっかり守っていかなければいけないという立場もあるので、どういった形の参画が可能なかっていうところはさらに考えていきたいと。そこで恐らく共通項になるのは、教育課程、学びです。

学びに地域の方が入ることで、学校の中だけでは出来なかったような形に発展させていくということができ、それによって教職員も変わり、子どもも変わり、学びが深まり、輝き始めてというところに、コミュニティスクールの一つの学校運営参画の可能性があるのかなというところですよ。

#### ○傳田氏

少しずれてしまうかもしれませんが、私がお話を聞いている中で思ったのは、校長先生のビジョンが大事というお話がありましたが、ビジョンを作られたとき、それに「いいね。」「やるよ。」ということは、参画になるか、参加なのか、どちらなのかなと思いました。そのビジョン作りから、一緒にやるのが参画なのかなというイメージもありましたので、ある程度デザインができたところに、「やるよ」「頑張ろう」というのは、どっちに当たるのかということ私の一つのモヤモヤになっています。

#### ○早坂座長

参画なのか、参加なのか、ここの線引きはやはりとても難しいところだと思いますが、今、傳田さんから出していただいた論点でしっかりと共有すべきポイントは何だったかと。おっしゃるとおり、校長先生がつくったものがそのまま出てきて、みんなが「いいね、パチパチ。」というのは恐らく参画ではなく、今までの仕組でも十分にできることだと思います。例えば、学校評議員会制度、地域の方が学校の中に入って校長先生のビジョンを聞く、これも大事ですが、それだけでは要は聞いて追認するというか、「そういうことをやっているのがわかりました。」「OK」というだけで、そこに地域住民の主体性は全くないですね。「そのようなことをやっているなら、こんなお手伝いができるかな」というお手伝いのレベルでは関わりが何か生まれることはあったとしても、要は校長先生のビジョンはまるで変わらないわけですし、地域の人もお手伝いとしての立場が何も変わらないですね。

ビジョンを共につくっていく、この「共に」「主体性」「自立性」ということを先ほど塩原さんもおっしゃられていましたが、好循環が生まれていく時というのはどちらも自分で考えて、自分で判断して、この自主性、自立性のところが、感覚のとても大きなポイントになるだろうと私は思ったところですが、皆さんいかがですか。

恐らくどの関係性も「参加」から始まると思います。どこの関係性も、最初は共にテーブルを囲むところから始まり、まず、校長先生はその時点でお考えのビジョンを出していただく。それを「よかったね」と拍手をするだけ。そこから恐らく、あらゆる関係性が始まっていくのかもしれないですね。それをだんだんと階段を上っていくように、参画の方向に進んでいく時に、ここがこの検討会の大事なポイントだと思いますが、国型コミュニティ・スクール、学校運営協議会制度を入れて、地域住民にある程度の権限を持たせることで、その階段がさらに上がっていくのであれば、これは私たちがより推し進めるべき制度として、国型コミュニティ・スクールを捉えることができると思いますし、信州型でいけるということであれば、国の方針を横目で見ながらも、現状をさらに深めていくというやり方もあるのでしょうか、その辺も今後5回の会議の中でしっかりと論点を明確にしながら考えていきたいなと思います。

#### ○城村氏

河西さんの「地域の必要に応じていく」というところから、学習指導要領に基づいた地域との連携の話は、とても良い気づきをいただきましてありがとうございます。まさに話が進んでいるとおり、やはり参画と

いうところが、要は肝かなと思っています。ただ、保護者として思うのは学校の先生方の負担感が増すことに対する危惧があります。先生方にとって学校は職場ですので、その職場に多種多様な価値観を持った地域の方々が入ってくる、そこに様々な意見がぶつけられてくるようになった時に、学校とするとなかなか無下にできないというところで、ある程度防御線を張って、参画ではなく参加のような感じが現実にかかるのかなと理解はしています。ただ、学校の先生方は3、4年ごとに異動があります。ですが、地域住民というのはそれぞれ3世代4世代、同じ小学校・中学校に通いましたという方々が当然たくさんいらっしゃって、そういった方々というのは、地域としてその学校に対しての帰属意識、思いを持っているのかなと思います。学校サイドが参画をどんどん進めることを今すぐに求めたいということではなく、学校が子どもたちを教える、育てるとすることのみならず、地域を育てていく、あるいは地域が学校を育てていく。よく噂を耳にしますが、まさに飯田市の公民館活動は本当によく機能していることを聞いています。まさにそれも一つのモデルケースなのかなと思いますが、学校サイドとすると、少なくともそういった意識がより深まっていくのかなと感じました。

もう一つPTAという地域の側で考えると、学校に校長先生をはじめとした例えば運営協議会があって、学校がこういうことをやりたいですとなった時に、現実には追認をしてそれでいまいしょうかとなると思うのですが、やはり地域側としても毎年毎年その議論を深めていく、しっかりとこれまでの流れを確認しながら、地域としてはこのように学校を支えてきた、つくってきた、今後地域としてはこんな学校をつくらしていきたい、目指したい。そういったものも、地域側からも学校に対して建設的ないい形で共有していくことも地域側の責任なのかなと。ただ言いたいこと言って先生方の負担だけが増えていくということではなくて、その辺の建設的な生産的な議論や関係性というのが求められるのかなと感じました。

#### ○早坂座長

両方の側からしっかりと考えていかなければいけないというところが、本当に心から共感するポイントだと思います。この地域との連携・協働が学校の負担感を増すようではいけないというこの論点はしっかり押さえておきたいポイントだと思いますが、むしろ負担感は減ったとかそういったご意見、ご経験がいただけたらと思います。

#### ○河西氏

負担感についてはポイントとして、無理はしないということが根本にあって、学校も地域も無理はしない、そうでないと持続可能には絶対ならない。例えば、私がこのような話をした時になかなか分かってもらえない方たちがいて、それは特に地域の方ではなく学校の関係者。私は子どもと地域の成果を重ねるのではなく、もっとストレートに地域の必要感を最優先するという言葉を使っていました。そしたら、子どもたちは地域にこき使われる存在になってしまうかもしれないというようなことを学校の先生方は抱くことが多いのかなということが分かりました。その話をしてくれた方が、例えで言ってくれたのが、小学校の低学年のお子さんたちが、何か動物を飼いたいと言った時に、何を飼いたいと聞いたら、キリンさんを飼いたい。子どもたちがキリンさんを飼いたいと言っているから地域の方に何とかしてくださいと持っていっても、キリンさんを飼うことは地域の方にとっては必要がないことであって、余計な仕事にしかならない。それでも子どもたちのためにと地域の方がとても頑張ってくださいなのですが、それは大変なので、どういうことになるかという、指示はいつでも先生方が出さなければならず、子どもたちにも地域にも先生が出さなければならず、先生の負担がとても大きくなってしまいます。先生方の負担が大きくなるというのはそうい

うことかなと。ただ、それがキリンさんではなく、例えば地域の方が課題として持っているお祭りに子どもたちの力が欲しい。これはただ子どもたちが楽しいから参加するのではなく、地域の方にとっては、高齢化が進んでいるため子どもたちの若い力がないとお祭りさえも存続できないという大きな課題があり、子どもたちに「お祭りに君たちが必要だ」という、その必要感をぶつけてもらい、お祭りの場を与えてもらう。これは君たちの力が必要だという仕事がちょっと増えるだけで、あとは、お祭りをやることは全然変わらない。先生たちにとってみれば、それを聞いて、みんなどうする？と。先程、お手伝いというお話が出ましたが、お手伝いではなくて、参加するために主体的な、自分なりの課題を持って参加しようという気持ちをつくる部分を学校がやるという役割分担をする。そうすると学校の先生にとっても、時間は総合的な学習の時間や特別活動の時間が確保されているし、授業としてそれを扱える状況が生まれるわけです。学校の先生にとっても負担感が少なく、何より、先ほど話したように、アイデアを地域の人が出してくれるので、あれやってこれやってと言わなくてもやってくれるので、とっても楽になることは間違いないと思います。

#### ○早坂座長

無理はしない、すごく大事なキーワードをいただきました。子どもの学びが充実することを嫌がる先生は、おそらく学校には1人もいないと思います。子どもの教育が、子どもの目が学びで輝いていくこと、それ自体を喜びに感じる方…信州にはたくさんそのような素敵な先生がいらっしゃると思いますが、そこ地域との必要性と重ねていくというところ、先程の話にもありましたけれど、無理をしないという言葉ですごく腑に落ちるところだったかなと思います。

資料を共有させていただいて、また皆さんのご意見をいただけたらなと思います。共有させていただく資料は平成30年から31年にかけて、教育委員会と学校のご協力を得て、小中義務教育学校の調査をした時の結果の一部を共有させていただきます。

左側にコミュニティスクールをやってよかったことは何ですかという校長先生の認識が20個並んでいます。右側にどなたがコーディネートしていますかという、中心的なコーディネーターとして学校職員、主に教頭先生がコーディネートしている場合と、地域の方が参画して学校と地域を繋いでいるコミュニティスクールと、あるいは行政が繋いでいるところと、結果がかなりクリアに、この黄色の部分がかうまくいっているところと簡単に言うと評価できますが、地域の方の参画が、校長の認識でいうと例えば児童生徒の学力が向上したというところに非常に高い相関が出ました。まずやはり学びが変わっていくということ。あともう一つ先程の負担感と合わせて考えていくと、保護者との、あるいは地域との関係性が向上するという結果も出てきています。

これまで地域の皆さん、あるいは保護者の皆さんは、教育は学校の仕事だろうと言って、何か教育に関して、あるいは子どもに関して、おかしいなと思うことは学校を責めるような形で苦情が出ていたのが、地域の方に学校に参画していただくことで、教育はみんなの仕事だよね、みんなで作っていかなければならないという、先ほどの校長のビジョンの変換のお話もありましたが、地域住民の考え方もまた変わっていく。それが、これまでのコミュニティスクールの調査研究の中で、特に信州をフィールドにした調査研究の中で見えてきたことなのかなというようにも思います。

つまり私たちは、地域も学校も家庭もそれぞれ違う価値観を持って生きているので、コミュニケーションが取れないところに、連携・協働、あるいは共に何かをやっていこうとか、そういった雰囲気はなかなかできないだろうなと。まずはビジョンを共有する場を作って議論して、最初は参加だったものが徐々に参画

の階段を上っていくように、地域も変わるし、学校も変わる、その両者が変わることが子どもの教育を充実させる。そのようなことが調査結果から見えてきたと思います。

#### ○塩原氏

今のお話の中で、無理なくいうことが出てまいりましたがそのとおりだと思います。それを実現するためにどうするか、ということになります。このことについて、大町市では学校評価の充実に目が向けられています。国型のコミュニティ・スクールをやっていれば、学校関係者評価は学校運営協議会の委員が行うことが多くなります。そこでは、学校の自己評価の場に学校運営協議会の委員の皆さんが参加するようになります。このことにより、学校の悩みが学校運営協議会の皆様に正確に伝わるようになります。結果として次年度に向けて、学校づくりを校長先生と協議する場合は、学校の悩みを解決するためのビジョンづくりの場となります。これが参加ではなく、参画です。以上のことから一つ提案申し上げたいのは、長野県の今までの信州型の経験の上に立って、一步進めて国型にすることが、今、皆さんが議論されたようなことを実現していくことに繋がるのではないかなと思います。

#### ○早坂座長

悩みの共有はとても面白いところだと思いますが、心理学では自己開示すること、要は自分をさらけ出していくこと、弱さも含めて、自分ができていない悩みも含めて人と共有していくことが、我々が人間関係を構築していく上で非常に重要なファクターになっていくことが知られています。自分の承認を求めて自分の情報を提供するのを自己開示じゃなくて自己呈示というように、あえて違う言い方を心理学ではするわけですがそれでも。私たちはこんなことを考えています、これから頑張っていくというの、ただのビジョンの共有、ただの自己呈示ですよ。ね。「頑張っていますね」「応援します」というように承認を引き出すとするわけですから。悩みはそうではないですよ。むしろ自分の腹の中まで地域の人に見せることが逆に地域の人にとっても、胸襟を開く、心を開いていく非常に大きなきっかけになるのだろう。なかなかお立場上、弱さを見せにくいところに校長先生はいらっしゃるのかもしれないですが、悩みの率直な、正直な共有というところが、参加を参画に変えていく上で、住民の主体性を引き出す上で何かとても大事なポイントではないかと思いました。

#### ○堀田氏

学校の先生方の立場ですけれども、分からないと不安だということがたくさんあって、それが負担になることが非常に多いです。地域との活動も、既に確立されていて、ある程度繋がりがあって地域の方がどんどん来てくれるようなところは、先生方も本当に楽ですが、まだそういうことが確立されておらず、1からつくっていかなければならないとなると、先が見えない、どうやってやったらいいか分からないので、とても不安が大きいのです。こうやりましょうと提案するとやはり反対があったり、今だけでも精一杯なのに負担になりますという先生が非常に多いです。これが全てではないのですが、そんなことが多いですね。自分の経験から、総合的な学習の中で地域学習というのを進めて結びつけていくと、とても学習が進んでいくのですが、この総合的な学習が探究を求めて始まっていったと思うのですが、初期を少し過ぎた頃からそれが少し負担になってきて、体験型といいますか講座を開いて地域の講師を呼んで体験してということを経験の学習として導入してきたところがたくさんありました。それは毎年似たようなことをやっていけば良いので負担も少なく楽ですが、そこには体験はあっても探究はあまりないのです。これ



を思い切って探究していきましょうという学校のビジョンを変えて、地域の人を入れて探究していく。そうすると、その面白さが分かってくるのです。

先生方も子どもも何かすごくわくわくしたりとか、魅力を感じたりとか、楽しさが分かってくる。そうすると、職員もやる気になってくるし、子どももやる気になってくる。さらに地域にこういう人いないかとか、こうやって関わってくれる人がいないかとなってくると、どんどん広がって行って、地域の人から学校の方に来るのです。そうすると、先生方の負担はすごく楽になって、子どもが動き出す。地域も動き出すので、負担が少なくなって、どんどん進んでいくということが分かりました。

昨年、学校のコーディネーターという役割で運営委員会を開いたのですが、前年を踏襲して会議も開きましたが、なかなかうまく乗っていきませんでした。なぜだろうと思いましたが、楽しさがまずないなど。地域の人はどうやって関わっていいか分からないということもあり、無理を承知で、自分がこの地域に何ができるかなとたくさん提案してみました。

例えば、この地域には海軍壕というものがありますが、その海軍壕で何かカレーフェスティバルを開いて、それをもとに地域の名所などで何か特徴的なカレーを作り、ウォークラリーなどで地域を巡ったりするような面白い活動を地域でできないですかね、という話をしました。そしたら運営会議の方々が非常に乗ってきてくれて、それならこうやってやればできるのではと、様々な案が出てきました。まだ実現はしていないのですが、これをきっかけに、地域の人がこんなこともできるからと乗ってきてくれたのです。これはいけるぞということで、今年、その運営協議会に今までは地域の方と自分や校長先生しか出ていなかったところを、学校の職員の先生みんなに出てもらい、うちの学級はこういうことをやりたいですという先生方のビジョンを話してもらいました。そうしたらすぐ地域の人が動いてくださって、畑を借りてくださったり、学校の花壇に来て「こうやって作るんだよ」と子どもと一緒に取り組んでくださったり、その輪がどんどん、どんどん広がって行って、とても活動が広がったということがありました。このように1回波に乗ると先生たちの負担も非常に軽くなり、魅力や楽しさがあると子どもたちもすごく乗っているので、このようなところからまずスタートし、そこから学校の運営に地域の方が入ってくるとビジョンが見えやすくなっていくのかなと、やってみて感じました。

#### ○早坂氏

私も研究のテーマとしていつも気になっていることが、この「乗ってくる」という、まさに今堀田さんが言われた、この現象です。地域の方も楽しくなってきて、学校も楽しくなってきて、そして子どもも楽しくなってきて、みんながこれまでやってきたことの負担感が充実感に変わっていくというか、やること自体は増えているはずなのに、わくわくがもっと増えているので、結果的にもう止まらなくなっているという実践を、ここ信州でもたくさん見させていただきました。これ面白いぞと思ってはいても、どうやったらそのようになっていくのかということが、私の中でクリアにならなかったのですが、堀田さんのお話を伺って、「分からない」ということへの不安、これはかなり心理的な負担になっているということが、はっとさせられる言葉だったと思います。学校の先生方も地域の皆さんも繋がってどんな楽しいことができるのか。逆に繋がることで何か怖いことが起きてしまうのではないかという、分からないがゆえの心理的な負担を抱えているところからスタートする。しかし、何か必要に応じてとか、やらなければならないでやっているうちに、例えば総合的な学習の時間や、探究的な学びをきっかけに何か繋がってみようとした時に、あれ面白いかもとだんだん

気づき始める。この分からないという不安はやはりまだ多くの学校の先生や地域の皆さんがお持ちではないかなど。

「これって面白いですよ」ということが、どうしたら伝わっていくのかというのも少し考えていきたいなと思いました。

#### ○河西氏

今の「分からない」はまさに私もそうだったため、分からない時には地域連携は負担でしかなくて、やれやれと言われてもやりたくないというのが正直なところだったのですが、どうやったらいいか分からないは、分かっている人たちに聞いてみるのですが、その人たちもなかなか教えてくれなくて。私は「野生の勘」という言葉を使っているのですが、「野生の勘」で出来てしまう先生と、私のように出来ない先生がいて。私にはできないだろうなと思っていましたが、それが共有できるのではないかと、というのも先程の地域の必要感をきちんと意識して、課題設定する。そのために具体的に何をすればいいかという、すごく難しく考えると分かりにくくなるのですが、最初に地域の人たちに、子どもたちへ「君たちの力が必要だ」と言ってもらおう。食品ロスのことを考えたクラスの子たちのところに、地域のリンゴ農家の人に来てもらい、リンゴの後継者がいないという話の中で、「全員が後継者になってくれなくても分かってくれる人ができるだけ広がるかもしれない、君たちの力が必要だ」と言ってもらいました。そこから「うちの農家に来い」とその方が言うてくださって、行ってみると子どもたち一人ひとりに1本ずつリンゴの木を用意してくれていました。「君たちの名札をここに付けて、君たちがこのそれぞれのリンゴの木を、心を込めて育ててくれ」と言うてくれました。りんごを用意してくれることは、担任も知らず、行ったら用意されていた。地域の人々の必要感に重なったことをやると、地域の人々のやりたいことがどんどん出てくるのはそういうことではないかと。

本年度、本校で取り組んでくれた学年に、地域の人たちに『君たちの力が必要だ』とまず言ってもらおうんだよ」と言ったところ、学年主任が打ち合わせの時に松本の地域づくりセンター長さんにビデオメッセージを撮らせてくださいとお願いし「今高齢化が進んでいて、その対応がとても大きな課題だ。君たちの力が必要だ。」と言ってもらいました。次の日、学年でそのビデオを流して見せました。それだけのことだったのですが、子どもたちにどうするか聞いたところ、「地域の人たちが何に困っているのか聞きに行こう」と子どもたちから出てきました。しかし、本当は打合せの際にセンター長さんが「子どもたちには地域の高齢者のところを回ってアンケート調査をしてもらいたい」と計画やカリキュラムを作ってきてくれていたのですが、そこまでやってしまうと子どもたちのやらされ感が強くなってしまうため、とにかく必要なことだけ伝えてもらえば何か出てくるからと言っていたら、やはり意見が出てきて、というように進んでいきました。一つのやり方ですが、これはどうでしょうか。

#### ○早坂座長

今日の冒頭からずっと伝えていただいている地域の必要感に学びを重ねていくということは、やはりすごく地域の人たちが乗ってくる上で欠かせないポイントだろうと。何よりやはり私たちが共通して一番大事だと思っている子どもたち。子どもたちの学びをやらされ感から解放していく上で、「君たちの力が必要だ」という言葉が学校の外から投げかけていただくことが、教育的に凄まじい意義を持っているという、ここがとても惹かれるポイントだと思います。どうか子どもたちをやらされている学びから解放して、自主的・自立的に自分で学びたいと思って進んでいく子どもたちを、誰だって作っていききたい、育てていききたいと学校の先生も地域のみみんなも親もみんな思っているわけですね。

それはもしかしたら、単独の人、親だけとか、学校だけとか地域だけではできないのかもれないなというのが、河西さんのお話を伺っていて感じました。一番乗らせたいのは子どもたちです。学校の先生を乗らせて、地域の人を乗らせて、誰を最終的に盛り上げていきたいかと言えば子どもたちなので。子どもたちを乗らせるには、単独の職務を持っている立場の人だけでは難しいのかなということが、ちょっと見えてきたような気がいたしました。

#### ○城村氏

学校と地域、双方に弱さとその必要を知ることがやっぱり大事なのかなと感じています。そのためには、本当に深い良質なコミュニケーションが求められるのかなと思いますが、お互いの弱さや必要を理解していかなければならないと今日一つ大きな学びになりました。

私の場合は小中学校ではなく高校の方で探究授業の担当をしています。駒ヶ根市にある赤穂高校で、商業科の生徒たちに向けて課題研究という探求授業を5年やってきています。高校生が本物の結婚式を作っていくというものですが、始まった当初からフルスペックの結婚式、ゲスト60人のような本物の結婚式を作っていくものです。そのため、なかなかの作業量があるのですが、当然学校の先生方が出来るわけではないので、ブライダルをずっとやってきている人間として、私が関わっています。

その時に先生から言われた言葉でとても印象的だったのが、「城村さん、私たちは会計・簿記を教えることはできますが、そのことをとおして1円を稼いだことがないのです。だから学びを通して1円を稼ぐことの価値を教えてください。」と最初に言われたのです。私はとてもその先生の言葉に励まされました。私は学校の教師ではないので、当然できないことがたくさんある。しかし、学校側もやりたいけど出来ないことがあるというお互いのニーズや目指したいビジョンが合致した瞬間でした。そこからこの5年間の営みが育まれてきたのかなと思っています。

河西さんから地域から必要だと子どもたちが言われることが大事とありましたが、私自身も高校生と関わってとても感じるがあります。彼女たちと1年活動を共にしてきた中である時、「あなたたち僕のこと大好きだよ」と聞いてみました。「どんなところが好きなの。」とダイレクトに聞きました。その時に彼女たちが何の恥ずかしげもなく伝えてくれたのは、「城村さんはいつも私達に『ありがとう』『ありがとう』と言ってくれますよね。その言葉で私たちすごく頑張れました」と言っていました。とても目からうろこでした。

よく考えてみると、確かに児童生徒たちって、学校の教育現場で先生方からありがとうと言われることはほとんどないのじゃないでしょうか。それが地域の人が入ってきて一緒に物事を作っていた時に、私は毎日感動していますので、彼女たちの頑張りに「すごいね、すごいね」「ありがとう、ありがとう」と、もう会うたびに言うのですが、どうもその言葉で彼女たちの中にすごく熱いものが生まれてきたようでした。これは言われてみて初めて気づきました。

先ほど河西さんの地域から必要とされているというメッセージが大事だというのは、私自身も実体験としてとても感じています。

#### ○早坂座長

ありがとうの持つ教育的効果の大きさ。いろいろなことが繋がってきました。このような形で今私達の共有している学校参画のイメージがだんだんと輪郭をはっきりさせていったのかなというところですが。

#### ○傳田氏

地域や産業界といった側が、子どもが学びの中で、メリットというか起こってくる変化を非常に私も目にしています。そのため、今度はそういった学校の先生や行政の方をはじめ様々なステークホルダーの方がリアルにどう感じてどう変化が起こってきたのかというのを、皆さんにお伝えできるようにしたいなど全体を見ながら感じたところです。

#### ○早坂座長

関係性が変わって新しい価値が生まれていくその現場に立ち会われた経験は、「分からない」ことが「楽しさ」に変わっていく時の非常に大きなポイントになると思いますので、是非、引き続き情報共有いただけたらと思います。

第2回以降も是非、皆さんの主体的自立的な、それぞれの活動の共有であるとか、ご意見の提案をいただけたらと思います。ありがとうございました。

### 6 内堀教育長より感想

早坂座長さんをはじめご参加された皆さん、本当にお疲れ様でした。また、ありがとうございました。皆さんも途中でおっしゃっていたように私自身も、議論を聞きながらどんどん楽しくなってきた、そういうこともあるのか、こういうこともあるのかという学びがたくさんありました。感謝を申し上げたいと思います。

今日の議論の中では座長さんの提案の中で、学校運営参画ということについての議論を中心にしていただいたのかなと思っています。その中で、参加と参画というようなことの違いについても、議論をしていただきました。最初は、例えば地域の側からこうだ、学校側からこうだというような乖離といいますか、うまく擦り合わないところがあるのではないかという議論から、だんだん擦り合うというか、そこが合致するために、どのようなことがあればいいのかという議論に変わっていったような気がしています。

議論というのは「誰にとって」というところが一つあると思いますが、コミュニティスクールに関わる、例えば地域の方にとってとか、教員にとって、生徒にとって、誰にとっても良い形、納得感がある形があるといいのかなと思っています。その点ではだんだん楽しくなるとか、わくわくするとか我々が使っている言葉ではウェルビーイングということだと思うのですが、そのような形がどんどん出てくるのが誰にとっても良いという形なのかなと思います。

議論の中で、早坂座長さんから、「参加という状態から参画というものに移っていったところに階段のような段階があるのではないか」というようなご指摘をいただき、私も全く同感であります。学校参画においてどういう状態が、どのようになっていったら良い状態、ウェルビーイングの状態になっていくのかということや、あるいは地域と学校の協働活動においても、最初はこうだと思うけども最終的にはこういう形が良い形だとか、これもコミュニティスクールそのもののあり方として、最初はこうかもしれないがこうなっていけば良いという良い形のイメージができていくと、最初はどうなるかわからないというような不安があっても、将来的にはこのようにやっていけばこう示せるということが、不安を払拭しながら目標に向かって動いていくことに繋がっていくのかと思いました。

もう一つ、今回の議論の中で、地域の方の参画という話がだいぶ出ていたというように思っています。現実的に学校という組織も変わってきておりまして、多くの学校では教員と児童生徒だけでつくる学校というものが必ずしも子どもたちの成長や教員の達成感や充実感、あるいはウェルビーイングに繋がらな

い。むしろ学校の外の人たちの力を借りて学校をつくっていった方が、生徒にとっても教員にとっても良いのだという認識は持っていると思います。

しかし一方で、学校によるかもしれないし。考え方によるかもしれませんが、例えば、地域の方には、「我々が言うここにだけに参加してもらえばいい」というような考えでやっているという部分だとか、逆に地域の方からすると、「〇〇中学の〇〇部の人たちにこの時に来てもらえばいい」というような、参加を促すようなものがまだあるのではないかなと思ったりもします。そういったものが参画することで、実際に一緒に考えて一緒につくっていくことが大事だと思いますが、教員の地域の活動への参画というような視点や、あるいは子ども、児童生徒の学校運営や協働活動への参画、ただ言われたとおりやるのではなく、自分たちはこうしたいという視点もとても大事だというような気がします。子どもたちは言葉が拙かったり、うまく表現できないということがあるかもしれませんが、私はこうしたいという願いや思いがあると思います。子どもたちの参画という視点も、コミュニティスクールを通じて地域協働活動や学校運営参画というものにどのように繋がっていくのかがいいのかという議論もしていただけると大変ありがたいなと思ったところであります。

本当に楽しくて充実した議論をやっていただきました。次回以降もまた楽しみでありますので、引き続きよろしくお願いいたします。

## 7 閉会

○岡田課長